

かるた

7号



(平日 8:50 ~ 18:30)
(土曜日 8:50 ~ 16:30)

学習院大学図書館 運用課

映像の中で

先日、NHK TVで「シルク・ロードを翔ぶ」を見た。シルク・ロードは西安(昔の長安)から広大な黄河を渡りローマにまで続く道で、東西の文明を2千余年にわたり連結し続けたパイプの役割を果たしていた。

西安から西へ北道と中道の全行程4500kmを710707から古代の遺跡や、祁連山中は山丹軍馬場の2万頭の放牧等を空中撮影したものである。

次々に展開される中国西域の古代遺跡、タクラマカン砂漠、神秘的な湖、万年雪を抱いたボゴダル峰、祁連山脉の峰々、天山山中の羊の放牧など、どれを見てもただその大きさに驚くばかりである。中国中央部でも、これらの西域は詳細に把握していないらしく、地図上ではオアシス都市トルソンの近くにあるアイティン湖(琵琶湖くらい)にすぎない水がなかったり、千年も越えた遺跡がそのままの形で風雨にさらされて存在している。大陸というその無限に広がる大地、殺伐荒涼とした砂漠地帯、スケールの違いを改めて認識させられた。

そのすぐ後に「名曲アルバム」という数分の番組があって、『六段の調べ』が流れ画面には京都黒谷の八橋検校の八橋寺(常光院)と法然院が映し出されていた。はかりしれない大陸の大寺院と遺跡に感激驚嘆した直後だけに、その箱庭の様な寺院が不思議と異質なものに見え、普段見なれた日本のお寺もこの時は、またひと味違う様に思えた。飽き、寂を極めた小さな寺院を異国人の眼で垣間見たような気がした。

同じ仏教国でありながら文化の違い、思考様式の違いを切実に感じた。日本民族特有といわれる島国根性的発想、狭い領域での思考の展開、目先の事に目を向けがちな性質、非論理的思考様式等を新に認識痛感させられ、自分という個体が小さくちっぽけなものにさえ感じられた。

80年代を向え、これからの社会は世界を縦横に翔めぐる時代になるという。発想の転換の必要性和広い視野を持つ真の国際的
社会人と成るべく、我々は少しずつでも自己変革をしてゆかなければならないだろう。

参考図書の解題

「日本国勢図会」 矢野恒太記念会編

国勢社発行 RP.059-8

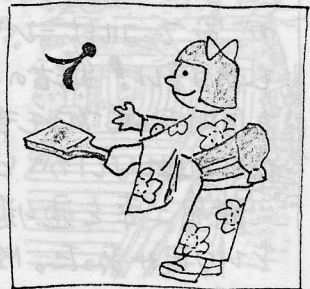
故矢野恒太(第一生命保険相互会社の創立社、社会教育家、統計学者)は、現在の学校の社会科で教えているような知識が一般社会の人々に必要なことを思い、その為の統計利用も普及する必要性があるとし、昭和2年に創刊することとなる。昭和29年以降は年刊となる。

経済・気候・貿易・農業・工業等の国民生活に関連のある項目があがっている。しかし統計・図版がいたる所に出てくるが、我国だけでなく海外の、しかも官庁だけでなく民間の統計を駆使し、科学的裏付けで確固たる態度で情報を与えている。統計・図版には心ならず典拠が示され、また他国との比較も豊富である。巻末には、所々に記載された解説欄の目次索引(11p)、主要参考資料書目の記載がある。〔野村〕

《1月の展示》

探検家スタインの著作集

19世紀の末から20世紀の初めにかけて、中央アジア探検の盛んな時期、最も大きな人物をあげるならスタインとヘイデンである。ヘイデンは著述に於て行動に於て、派手なところがあり我国でも多くの翻訳があつて著作集まで



刊行されている。スタインは控え目な学者で著述は正確を第一としているが、その著述は人を魅せて止まない。しかしながらスタインが知られない原因の一つに、その著作が入手しにくい事によるのかも知れない。

アフガニスタンの首都カブールにスタインの墓がある。古代の歴史をさぐつて旅を続ける老探検家スタインは、パキスタンのペシャワールからカブールに着いた時風邪がもとで82才の生涯を終えた。1943年10月26日のことであつた。

中年司書の青春—その1

本と珈琲 ③

僅かに残っていた名曲喫茶やジャズ喫茶も遂にインゴードにやられたり牛どん屋に変身してしまつた。自分の二十代と深いかわりがあったものが次第に消えてゆく。

音楽会という高い入場料と、あの息のつまる様な感じに堪えられなかった私は、名曲喫茶で初めてバッハに触れた。店内の装飾—今はインテリアと言わねばならないが、オーディオ装置を競い合つていたので、音楽を聞く場所としてこれでもか、という感があった。それがコーヒー代だけで味わえた。

団地の六帖向に30万円もするシステムコン(System Component Stereo)が侵入して、ジュテ・オングの音が壁を伝わってきたりする。独り住いの下宿部屋にも高級機が並んでいるそうだから、こうした喫茶店が消えてゆくのは仕方がないと思つた。家でコルトレオンなんかを聞いても、どうも違ふのだ。年のせいでもあるまい。生活の匂い、ふんぷんの部屋でモーツァルトなんかとても聞けない。フロアモデル作りのB.G.M.として小さく流すには良いかも知れないが、どうもしっくり来ない。

新宿二幸を通り過ぎて歌舞伎町へ行く大通りに面して「木馬」という店があった。M.J.Q.全盛時代だったか、ここに入りびたつていた私はセロニアス・モンクや既に入手しにくくなつていたバド・パウエルのピアノなどをイストしていた。

モダン・ジャズ(ダンモ)にとりつかれた若者が集まり、それぞれが“お前なんかにはジャズが解つたまるか”といった顔で、それでも知らぬ同志隣りあって言葉も交さないのに語りあつていた。錯覚かなければ、コーヒーが50円だったと思う。

(佐野)



試験期の到来とともに平生図書館から遠ざかっている人も仕方なく足を運んで来る。これを機会に図書館を大いに活用して頂きたい。

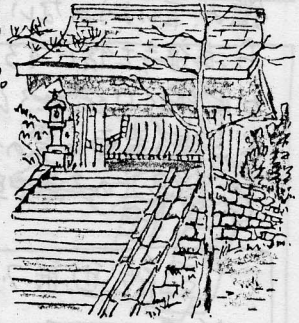
○パンフレット類

2階目録室の参考図書室寄りにキャビネットが置いてあります。ここには様々なパンフレット類が主題別に排列されています。また、それに続いて図書館及び類似施設要覧、大学要覧、学習院大学新聞記事切り抜き、学習院関係資料がそれぞれまとめられ入っています。

利用する時はフォルダーごと抜いて使用して下さい。もどす場所が解らなくなった場合は、二階カウンターに返却して下さい。

「腰越状」をめぐって

江の電の腰越駅に降りると、潮の香りがむーと鼻をつく。江の島に近いこの辺りはいかにも海辺の町らしい低い家並が続いている。松林がこんもりとおい茂った小高い山の中腹に、義経ゆかりの満福寺を訪れる。狭い境内は閑散とし、明るい陽光の中で穏やかな佇まいをみせている。わずかに見るものといえば弁慶が腰をおろしたと伝えられる平たい庭石と裏山から湧き出でる清水を義経が汲ませたという井戸だけである。しかしその井戸も今はもう、どんよりと濁った水面にただ枯葉を浮かべているだけである。



—若福寺—

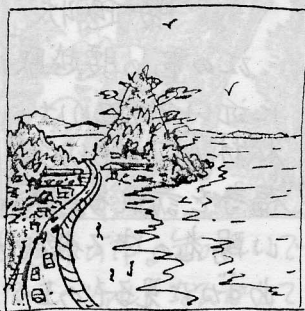
平家を壇の浦に討ち滅ぼした義経は意気揚々と凱旋する。しかし、兄頼朝の不興を買い、鎌倉入りは許されない。満福寺での悶々とした日々… その中でしたためられたのが世に言われる「腰越状」である。管理人の朴訥そうなおばさんに頼みごとく「腰越状」を見せてもらう。紙は茶褐色に変色し長い年月の経過を思わせる。何百年前、義経が実際にこれを書いたという思いが虚空に茫漠と広がる。文面からは何とか頼朝の怒りを解こうとする不安と焦りが滲み出ている。書状の内容に處しては凡そ知っていたつもりだ

が、次の件を見た時は「おやっ」という驚きとともに、初めて義経の内面に触れたような気がした。

『——故頭殿(義朝)御他界の由、実なきの子となり、母の懷中に抱かれて、大和国守多郡竜門の牧に赴きしよりこのかた、一日片時として安堵の思いに任せず、甲斐なきの命ばかりを存ふ、といども、京都の經廻難治の由、諸國を流れ行かして、身を在々所々に隠し、辺土遠國を栖となし、士民百姓らに服仕せらる。——』

自分の少年時代を述懐し、兄頼朝に、共に苦勞をした仲ではないか、兄弟ではないか、という思いを切々と訴えている。我々が誰かと仲違いをした場合、いささか愚痴めいてはいるが何とか繕いを度しようと、自分の事を語る時のあの調子である。いかにも義経の情に解されやすい、純朴な一面が窺われる。また、昔話を持ち出さなければならぬほど切迫した心境に追いやられていたことを物語っている。

その後の義経の平泉での無念の自害を鑑み、言いようのない感慨にとらえられながら満福寺を後にする。七里ヶ浜伝いに静かにゆっくり流れる海を見ながら歩いて行く。海の表面に雲の合間から放たれた光が地平線上の一点を軸とする黄金色の扇を形作っている。



—七里ヶ浜—

—河西—

絵画展フーム

近頃、絵画展フームというのか街のあちこちに色鮮やかなポスターが目につく。特に若い女性に人気があるようだ。デパート 商法の客寄せの一つとして外国の有名な画家の作品を選択しては開催している。絵画展自体は良いことで喜ばしいことだと思う。しかし彼等らは本当にこれらの絵画が解るのだろうか。本来 絵画の鑑賞は見ても楽しむもので、気に入った画家等の鑑賞をしたものである。それが最近では知的生活の一環としてつまり教養のひとつとして「私は絵画を鑑賞するだけの教養人・文化人なのよ!!」という事を誇示するかの様に絵画展を次から次へと歩き回る。

ここ数年の文庫フームと同じ現象ではないだろうか。文庫本も一つのアクセサリ

と同じで、手に持つ事によって教養人であるかのような錯覚に陥る。これは女性だけに限ったことではないのだが、真の芸術鑑賞、知的・生活的教養人と成り得るには、それなりの自覚と積み重ね、努力が必要なのではないか。

最近、いわゆるスーパー・スターがいなくなったように思う。かつては、そうよべる人が数多くいた。

日本プロレス界のキングカ道山、子供達には巨人・大鵬・玉子焼きと言われるぐらい大鵬は負け知らずで巨人も昔は強かった。それから、バグシの英雄アゲ、全世界のポップミュージックに革命をもたらしたビートルズ、世界の恋人的存在のエルビス。彼らはスーパー・スター中のスターであった。そして3億円強奪事件の犯人、日本中の女の子に抱きついたダッコちゃん、鉄腕アトム、鉄人28号等々、まだまだいっぱいあるのだが……。

よく考えてみるとこれらは全て60年代の産物である。あの頃はほんのほのとした夢があり、すべてが単純・明解で心から楽しくおもしろかった。70年代は軟物に複雑化、極端化しすぎて、殺伐とした由の解らないものか横行した。

80年代は、あの古き良き時代60年代に逆行するといつか、これを基盤に新しい物を生み出す傾向になるらしい、かはたしてどうなるか興味深いものである。

「かるね」も、より充実した内容にして、80年代にははげたく「かるね」となるよう努力していきたいと考えています。

製作・著作
学習院大学図書館
運用課 かるね編集委員
目白1-5-1 Tel. 986-0221
内線 378
1月16日(水) 1980

